

博士論文（要約）

論文題目

戦後日本宗教の国家意識と政治活動に関する宗教社会学的研究  
—新宗教運動のナショナリズムを中心に—

氏 名

塚田 穂高

# 目 次

はじめに—問題の所在—

## 第 1 章 先行研究と課題設定、方法論

## 第 I 部 戦後日本の「正統」的宗教ナショナリズムとその周辺

### 第 2 章 宗教運動と保守合同運動

### 第 3 章 真光のナショナリズムと運動展開 —霊的日本中心主義・皇室崇敬・超伝統性—

## 第 II 部 宗教団体の政治進出の事例研究

### 第 4 章 創価学会＝公明党 —王仏冥合論と国立戒壇論からの政治進出—

### 第 5 章 浄霊医術普及会＝世界浄霊会 —浄霊普及・政治進出・地上天国—

### 第 6 章 オウム真理教＝真理党 —シャンバラ化の夢想、ハルマゲドンの回避と政治進出—

### 第 7 章 アイスター＝和豊帯の会＝女性党 —化粧品販売から宗教、 そして「新しい女性の時代」を目指す政治へ—

### 第 8 章 幸福の科学＝幸福実現党（1） —宗教ナショナリズムの原型と運動展開—

### 第 9 章 幸福の科学＝幸福実現党（2） —宗教立国のための政治進出とその展開—

結論

参考文献一覧

論文の内容の要旨

## はじめに—問題の所在—

…人間の行為を直接に支配するものは、利害関心（物質的ならびに観念的な）であって、理念ではない。しかし、「理念」によって作りだされた「世界像」は、きわめてしばしば転軸手として軌道を決定し、そしてその軌道の上を利害のダイナミックスが人間の行為を推し進めてきたのである。

[ヴェーバー 1972 (1920-1921) : 58]

本研究「戦後日本宗教の国家意識と政治活動に関する宗教社会学的研究—新宗教運動のナショナリズムを中心に—」は、戦後日本宗教なかでも新宗教運動の持つナショナリズムについてその特徴を明らかにし、その上で新宗教運動による政治活動（政治関与／政治進出）との関連を考察しようとするものである。

宗教、とりわけ救済宗教は、歴史的に「普遍的救済」を掲げてきた。ごく単純に考えれば、そこでは教えに帰依する／これから帰依するであろう全人類が救済の対象となりうるものである。他方で、近現代に発生・伸張し、あるいはその中で再編されある種の適応をなしてきた宗教運動とは、自らの拠って立つ「ナショナル」なものと決して無縁ではいられないこともまた確かであろう。これらの点を併せて考えると、普遍的救済をとる近現代の宗教運動とは、普遍性と特殊性、ユニヴァーサルイズムとナショナリズムのアマルガムなのだと言え、その存在形態を思想史的かつ宗教学的な関心から考察するにあたっては、格好の対象と言えるのである。

ここにおいて、「普遍的救済をとる近現代の宗教運動」として主に想定することができるのが、新宗教運動である。新宗教運動とは、西山茂の定義にしたがえば、「既存の宗教様式とは相対的に区別された新たな宗教様式の樹立と普及によって、急激な社会変動下の人間と社会の矛盾を解決または補償しようとする、19世紀なかば以降に世界各地で台頭してきた民衆主体の非制度的な成立宗教」である〔西山 1995〕。日本の新宗教運動は、幕末に発生した黒住教・天理教・金光教・本門佛立宗あたりを嚆矢とし（さらに18世紀中に立教した如来教にまで遡る場合もある）、その末尾をどこに設定するかについては未だ十分な議論はなされてはいないものの、いずれにしても幕末維新期から約150年、黒住教立教から見ると200年近くにわたって展開してきた宗教運動のまとまりである〔塚田 2012b〕。その間には、江戸幕府の倒壊、明治維新、王政復古、富国強兵・殖産興業、大日本帝国憲法の発布、教育勅語の下賜、日清戦争、日露戦争、不平等条約改正、第一次世界大戦、満州事変、日中戦争、太平洋戦争、敗戦、「国家神道」の解体、日本国憲法の公布、高度経済成長、石油危機、国際化の時代、バブル経済の隆盛と崩壊、冷戦体制の終焉、長期不況、グローバリゼーションの進展、中国の大国化、9.11と3.11など、枚挙に暇が無いほどの歴史的事件や経済・社会変動が横切っていった。日本の新宗教運動とは、こういった社会変化の影響を特に敏感に受けるかたちで、その思想を形成し、運動を展開させてきたのである。とりわけ本研究が対象とする戦後日本社会とは、戦前までのいわゆる「国家神道」体制が解体され、日本国憲法の「信教の自由」下において、特に新宗教運動が活発に活動を展開し隆盛をきわめたと言える時期にあたる。そのなかで、それぞれの新宗教運動は、単に自教団の教勢を拡大し、組織を強固なものにしようとするのみならず、どのような国家・社会に対する認識を練り上げ、どのような国家・社会に対しての働きかけを模索していったのだろうか。戦後社会のなかの宗教運動の展開分析を企図する本研究は、経済変動・社会変動・歴史的出来事に宗教運動がどのような形で対応するか、という社会学的な関心にも基づいているのである。

本研究で第一に焦点化するのは、新宗教運動のそなえるナショナリズム＝国家意識である。新宗教運動についてのこれまでの研究の蓄積は重厚である。宗教社会学会（1975-1990 活

動)に集ったメンバーらによる諸研究と、その集大成である『新宗教事典』[井上・孝本・對馬・中牧・西山編 1990]・『新宗教教団・人物事典』[同編 1996]をはじめ、多くの成果がすでに提出されてきている。だが、新宗教運動のナショナリズムについての研究蓄積は、いくつかの重要な研究(特に戦前の国家と新宗教との関係をめぐるもの)をのぞいては、必ずしも多くないと言える。それはなぜだろうか。その点については、新宗教運動の研究史のレビューを行う次章にて詳しく扱いたい。いずれにしても、本研究では、新宗教運動がどのようなナショナリズム＝国家意識を胚胎し、発信しているのかという点に特に注意を払い、その内容を分析する。それは、現世利益を入口とし普遍的救済に向かわせる新宗教運動の世界観において、「国家」「日本」の段階の認識構造を炙り出すことができる興味深い対象領域なのと言える。強力なナショナリズム、特殊なナショナリズムを打ち出すような運動は、またそれだけ独特な活動を展開する可能性を有している。そのためにも、ナショナリズムの論理構造に注目し、分析を行うことには意義があるだろう。

本研究の第二の焦点は、主に新宗教運動による政治活動(政治関与／政治進出)である。ここでいう「政治関与」とは既存の政党や政治家を運動全体で推薦・支援し関わること、「政治進出」とは運動が自前の政治団体・政党を結成し、自運動の信徒会員を主に国政選挙の候補者として擁立し関わることをそれぞれ念頭に置いている。宗教運動がなぜ、そしてどのように政治に関わるのか。「政治」という点では、一見ナショナリズム＝国家意識の問題と直結していそうにも思われるが、現実には複雑な様相を呈している。独特な国家意識に基づいて政治進出する場合もあれば、それが曖昧であっても進出する場合もある。強烈なナショナリズムをそなえているようでも、既成政党候補者を応援するだけのような場合もあれば、一切関わらないような場合もある。これらを分かちようメカニズムが存在するのだろうか。そのためにも、これらのパターンとヴァリエーションを丁寧に分析の俎上に乗せてみたいのだ。第一の焦点にナショナリズム＝国家意識を据えたのも、この点をクリアに見通すためなのである。

他方、「宗教団体の政治活動」と聞いて市井の人々がまず念頭におくのは、創価学会＝公明党(本研究で「＝」と示す理由は第4章で示す)のケース一辺倒であろう。創価学会＝公明党については、これまで数多くの研究・文献・評論等の蓄積があり、本研究で取り上げるのも今さらの感が強い。だが、考えてみたい点がある。はたして、創価学会＝公明党のケースだけで、(新)宗教運動の政治進出の問題全体を論じられるのだろうか。また、創価学会＝公明党の政治進出のケースと、他の既成政党・政治家の推薦や支援といった政治関与のケースを比較することで、独自の政治進出の理由がわかるのだろうか。そういった問題意識のもとに、本研究では、創価学会＝公明党のケースに加えて、さらに4つもの自前の政治団体を結成して政治進出を行ったケースを扱っている。必ずやこの研究領域に厚みを加えることができるだろう。

以上のように、本研究は、戦後日本の新宗教運動のなかでナショナリズムがどのような論理のもとに表出し発信されているか、そしてまたそれと政治活動との間にどのような関連性があるのかを明らかにすることを目指す、思想研究と運動論研究の視点を併せ持った、宗教社会学的研究なのである。

## 第1章 先行研究と課題設定、方法論

本章では、本研究「戦後日本宗教の国家意識と政治活動に関する宗教社会学的研究—新宗教運動のナショナリズムを中心に—」を遂行するための前提として、各領域における先行研究をレビューし、それらを踏まえた上で本研究の課題設定を行う。具体的には、戦後日本の政教問題研究、ナショナリズム研究、新宗教運動におけるナショナリズム研究、新宗教運動の政治活動研究の各領域についてである。

### 1-1、戦後日本の政教問題研究

本研究は、「戦後日本宗教」の「政治活動」を主たる対象の一つとするという点において、「政教問題」「政教関係」をめぐる領域に関わるものであるといえる。よって、まずは戦後日本における国家—宗教関係の基本枠組である日本国憲法の条文を確認しておきたい。

第20条第1項：信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

同第2項：何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

同第3項：国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

第89条：公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。

憲法20条と89条をめぐる戦後日本の政教問題はさまざまな領域に及ぶものであるが、大まかに整理すると、①靖国神社問題、②政教分離訴訟、③宗教教育、④宗教団体の政治活動、と分けることができる〔藤本・塚田 2012、高橋・山本 2012〕<sup>1</sup>。これらに加えて、歴史・公民教科書の問題や、国旗掲揚・国歌起立斉唱問題などが広い意味で関わってくることも想定できるだろう。

①の靖国神社問題は、戦前は公的な慰霊・顕彰を担っていた施設が、戦後に一宗教法人となったことが問題の淵源の一つとして大きいだろう。もちろんそこにいわゆるA級戦犯合祀の問題、戦勝国と敗戦国の問題、中韓等の政治的な問題等が幾重にも折り重なっているわけだが、政教問題としては、公的な死者を戦後政教分離体制下でどのように祀るか、内閣総理大臣ら「公人」の参拝等の是非を含め、公的な慰霊・顕彰とは何かという問題と要約できる。これについての研究は、評論的・イデオロジカルなものも含め、宗教研究・歴史学・政治学・思想史の領域などから数多く提出されているが、ここではその一つ一つを取り上げることはしない。

②は、津地鎮祭訴訟、山口自衛官合祀訴訟、箕面忠魂碑訴訟、愛媛玉串料訴訟、砂川市有地上神社違憲訴訟等の例が挙げられるが、山口自衛官合祀拒否訴訟は靖国神社問題と戦前・戦後の別はあれ基本的な構図は同じであり、愛媛玉串料訴訟も靖国とは、公的な慰霊・顕彰とは何かということである。また、津地鎮祭訴訟は地鎮祭、箕面忠魂碑訴訟は忠魂碑、砂川市有地上神社違憲訴訟はムラの神社がそれぞれ問題化されている。これらはおおざっぱに言ってしまうと、たとえば戦前であれば「伝統」「習俗」「当たり前」などとされ、あるいは公的なものであつ

<sup>1</sup> 他にも、境内地所有権の問題や、法人役員等の任命をめぐる問題、税制をめぐる問題や、宗教法人の情報開示をめぐる問題などが戦後日本の政教問題として挙げられるが、上述の①～④の問題に比べると、判例としてはともかくも、国民の生活・社会生活上に占める位置や注目は低くなると思われる。

たのが、戦後社会において問題化されていったタイプのものであり、市や県、国などの「公」が「宗教」にどこまで関わるかという問題だと言える。これについての研究は、事例が違憲訴訟ということもあり、憲法学の領域からの判例研究といった形での提出が多いのが特徴である。あるいは、政教関係の「正しい」形を求めての事例検討とオピニオン表明という形も目立つ[政教関係を正す会編 1993,2002,2011 ほか]。宗教研究の領域からの検討は必ずしも多いとは言えないだろう[塚田 2010d,2011a ほか]。

③の宗教教育は、政教問題という点にのみ焦点化するなら、公的教育機関における宗教教育の禁止というトピックであり、あるいは宗教的情操教育は（とりわけ公教育において）どのような形で可能かという問題である。これもまた「公」が「宗教」にどう関わるかという問題だと言えよう。歴史教科書や国旗国歌の問題も、「天皇制」との関連から、戦前の公的性格を戦後社会や教育の場においてどう位置付けるかという点では共通していると思われる。宗教教育をめぐるのは、主に宗教研究または教育学や道德教育の領域などから、成果が提出されているが、詳細な検討についてはここでは行わない。

以上のようにみてくると、これら①～③の問題とは、戦前日本の国家—宗教関係の枠組と、戦後日本の国家—宗教関係の枠組——「政教分離」「信教の自由」——との間における齟齬・矛盾に起因しているものだといってよいのではないか。

戦後の枠組が、「国家神道の解体」からスタートしたとするのなら、戦前のそれとはやはり「国家神道」体制だということになるだろう[村上 1970, 島薮 2010]。やや暴力的にその構成をまとめてみるなら、村上重良は、神社神道—皇室神道—国体の教義（国体論）から構成されるものとし[村上 1970]、島薮進はそれを批判的に修整しながらも継承し、神社神道—皇室祭祀—天皇崇敬システム（国体論）それぞれがリンクしており、それを下支えする運動があったと論じた[島薮 2010]。また、島薮の論は射程を戦後にまで延ばしており、戦後は神社本庁（民間）—皇室祭祀温存—天皇崇敬持続・「日本人論」の隆盛という点において、「実は国家神道は解体していない」と論ずる[同：185]。こうした論をめぐるのは多くの強い批判があるのは確かだが、当該の研究課題に有益なかぎりは活用可能性があると考えなくてはならない。戦前と戦後の国家—宗教関係枠組の連続性と断絶性という視点を提供している点において、戦後政教問題の一角を考察する本研究においては、参照しておく必要があるだろう。

他方、残る④宗教団体の政治活動の問題に目を移すと、どうやら①～③の問題とは性質が異なることがわかる。靖国神社問題や種々の政教分離訴訟や宗教教育をめぐる問題は、主に国や地方自治体が宗教的活動や慰霊などにどう関わるかが取りざたされたものであった。だが、宗教団体の政治活動とは、個々の宗教団体・宗教運動がどう公的な政治領域に関わるかという問題であり、ベクトルが異なることをまず確認しておく。

一般の人々が「政治と宗教の問題」と言われたときにまず念頭に置かれるのは、この宗教団体の政治活動のことである。そのような、宗教団体が特定の政党を支持することには、一般に強い忌避感がある。例をあげれば、2010 年実施の大学生 4,311 人調査では、「(支持するのは)よくない」54.7%、「どちらかといえばよくない」23.9%[井上編 2011]という結果である。また、1999 年実施の 1,345 人への世論調査では、「特定政党支持は好ましくない」27.0%、「選挙に関わることは好ましくない」35.2%[石井編 2011]、という結果が出ている。

だがそれにもかかわらず、国の見解としては、また法解釈的には、宗教団体の政治進出自体は問題がないことが繰り返し述べられている。日本国憲法制定前の 1946 年 7 月 16 日の第 90 回帝国議会の帝国憲法改正案委員会では、金森徳次郎国務大臣が「宗教團體其のものが政黨に加はると云ふことがあり得るかどうかは遽かに斷言出來ませぬけれども、政黨として其の關係者が政治上の行動をすると云ふことを禁止する趣旨ではございませぬ」と答弁した。この見解はその後も引き継がれ、比較的近年のオウム事件後でも内閣法制局は、政教分離原則は「宗教

団体が政治的活動をすることを排除している趣旨ではない」としている(1995年12月1日、参議院宗教法人等に関する特別委員会など)。このように国は宗教団体による政治的活動、政治進出を現状では排除しておらず、「国からの特権」「政治上の権力行使」(20条1項)にはあたらないとしている。選挙結果など、あくまで民意に委ねているのである<sup>2</sup>。いずれにしても、「宗教団体の政治進出」の問題とは、国家と宗教、政治と宗教をめぐる問題系のなかでは、やや方向性が異なっているということをまず確認しておきたい。宗教団体の政治活動に関する研究については、本章4節にて論じる。

以上、本節では、戦後(ならびに戦前)日本の国家—宗教をめぐる問題の見取り図とその基本枠組をまず確認した。その中では、本研究で扱う宗教団体の政治進出という問題が、独特な方向性を持った——憲法制定時にあまり想定されていなかった——ものだということ、憲法解釈的には問題ないとされつつも、市井の人々の関心を主に忌避という形で集めるテーマであることが確認できた。

## 1・2、ナショナリズム研究

本節では、ナショナリズム研究のレビューを行った上で、宗教運動のナショナリズムを分析する際の指標について検討したい。

政治学・歴史学・社会学領域でのナショナリズム研究は、E・ゲルナー『民族とナショナリズム』、B・アンダーソン『想像の共同体』、A・スミス『選ばれた民』、丸山真男『現代政治の思想と行動』、大澤真幸『ナショナリズムの由来』等をはじめ、代表的な書名を挙げるのに暇がない[ゲルナー 2000; アンダーソン 1997; スミス 2007; 丸山 1964; 大澤 2007 ほか]。本研究で時代対象とする戦後日本社会を扱った成果としては、例えば小熊英二の『〈民主〉と〈愛国〉』等があり、戦後から1970年代までの公空間におけるナショナリズム言説を丁寧に整理し総括している[小熊 2002 ほか]。だが、こうした研究成果の一つ一つを洗っていく作業はここでは行わない。その理由は、紙幅の都合等もあるが、第一に、こうした研究においては、本研究で扱うような人々の生活意識の基底をよく反映しているような民衆宗教運動にはほぼ全く注意が払われていない点である。従来の思想史・社会史研究の多くは、民衆が主体となった宗教運動の言説や活動について、その影響力・動員力に比して等閑視してきた面が指摘できるのではないか。よって、上述の諸研究等から、本研究遂行にあたって活用可能で有効な知見を引き出すことはやや難しいと言わざるをえない。

他方、宗教とナショナリズムをめぐる問題系は、M・ユルゲンスマイヤー『ナショナリズムの世俗性と宗教性』、安丸良夫『近代天皇像の形成』、子安宣邦『日本ナショナリズムの解読』、中野毅・飯田剛史・山中弘編『宗教とナショナリズム』等が、主に国家あるいは政治制度的次元に関連させて研究をしてきた[ユルゲンスマイヤー 1995; 安丸 1992; 子安 2007; 中野・飯田・山中編 1997 ほか]。日本を対象とした場合、時代的には、近代国家成立から戦前の国家体制との関連を扱ったものが多いことが言えるだろう。これらのものも、先述の政治学・歴史学・社会学領域のものと同様、民衆の宗教運動のナショナリズムへの着目はあまりなされていない。すでに本章1節では、やや紙幅を割いて戦後日本の政教関係をめぐる問題のタイプを見てきた。そのなかでは、靖国神社問題や政教分離問題、宗教教育の問題等は、近現代国家がそのネイション成立によりどのような変化をとめない、ネイション内の「宗教」的要素をどう位置付けていくか、あるいは近現代国家の宗教性の形態と布置といった問題に通じるものである。ここまですべて挙げてきた諸ナショナリズム研究とも相性がいいだろう。しかし、本研究で扱うのは、近現代国家の枠内における、宗教団体の政治活動(政治関与/政治進出)の問題な

<sup>2</sup> もちろん特定の宗教団体を支持母体とする国政政党が、実際に宗教団体とどのような関係にあるかという問題自体は、常に問われ、検証されるべき問題だと考える。

のである。やはり、直接にこれらの研究蓄積から本研究に活用可能な知見を剔出するのは容易ではない。

その点では、体制的な「正統」ナショナリズムと、宗教運動の異端性にまで周到に目を配った安丸良夫の正統・異端（近代日本社会のなかの反対派的言説）論は、本研究にとってきわめて有益な視点を提供してくれている〔安丸 1992 : 222-223, 1999 : 238-239〕。安丸は、天皇の権威や国体論といったその時代の正統（オーソドキシイ）説（戦前でいうと「天皇制的正統説」）に対し、それを前提とし、またしばしばそれを権威のよりどころとして、そうした正統説のなかに生まれた異端説のことを「O（オーソドキシイ）異端」、もともと天皇制的正統説とはまったく異質な思想史的系譜にたつものを「H（ヘテロジーニヤス）異端」として論じている。安丸は大本や天理本道（ほんみち）のような民衆宗教をその例として念頭においており、むしろその可変性（主に H→O という同調）を捉えるために設定された類型であった。だが、本研究ではこの安丸の類型をやや換骨奪胎し、戦後日本社会における新宗教運動のナショナリズムと政治活動との関連を考える際の枠組として活用したい。新宗教運動の社会的布置の周縁性を念頭に置いたものであり、その思想（国家意識）と運動（政治活動）とを捉え、同調性や批判性を見る上で、この議論は有効性を発揮するだろう。もちろんそこには、「正統」「異端」という語の持つ評価的意味合いは含めない。具体的には、本研究の第Ⅰ部・第Ⅱ部にて展開されることとなる。

なお、本研究では、「ナショナリズム」の定義問題自体に深く立ち入るつもりはない。ここではさしあたり、「我々」は他者とは異なる独自の歴史的、文化的特徴を持つ独自の共同体であるという集合的な信仰、さらにはそうした独自感と信仰を自治的な国家の枠組みの中で実現・推進する意志、感情、活動の総称〔吉野 1997〕という定義を参照しつつ、やや広義に「国家・社会・「我々」についての集合的な意識、ならびに国家・社会・「我々」の共同体に関して独自性と理想を実現しようとする意志、感情、活動の総称」＝「国家意識」として設定し、論を進めたい。このようにナショナリズムをやや広く捉えることで、どのようなナショナリズム＝国家意識を有しているのか、それと活動——政治活動との間にどのような関係があるのか、その内的連関の様相を捉えることが可能になってくると考える。また、宗教運動——とりわけ普遍的救済を志向する宗教運動のナショナリズムを考える際には、ここでいう「我々」というのが、果たして一国の国民に留まるのか、同信の信徒たちを指すのか、はたまた全人類にまで拡大される意識なのかという問題も出てくるだろう。そうした微妙なずれや重なり合いを意識しながら捉えるためにもこうした広義の設定をしておきたい。

ただし、こうしてナショナリズム＝国家意識を広義に設定したからといって、対象の分析に徒手で向かうわけにはいかない。それでは単に「国家」について言及したメッセージなどを引用・紹介し、ナショナリズムが「あった」「なかった」「強かった」「弱かった」で終わってしまいかねない。その点に関連して、日本のさまざまなナショナリズムを研究したマクヴェイは、「ナショナリズムという概念が基本的な多義性（ambiguity）を持っているため、「ナショナリズム」の定義を探すよりも、その多義性の機能・役割・解釈などを「研究」したほうが有利である」と述べており示唆深い〔McVeigh 2006 : 6-7〕。個々の宗教運動を比較検討する本研究においては、そのナショナリズムの多義性の論理構造分析を試みるのであり、それにあたっては容易に比較可能な何らかの分析指標群を予め設定しておく必要があるだろう。

戦後日本の大衆運動たる新宗教運動のナショナリズムを考察することを鑑みると、ナショナリズム研究のなかでも国民意識や文化論、日本人論を扱った研究群の知見が有用である。

政治学者の渡辺治は、現代日本のナショナリズムの克服課題として、近代日本の帝国主義の経験の処理、反米主義の取り扱い、天皇の処理の3点を挙げている〔渡辺 2001, 2004〕。これらは戦後日本の諸ナショナリズムにとっては、触れずにはおかない問題であり、その対処法



やそれに関する言説を比較検討する際の指標になりうると思う。それぞれをさらに敷衍してみると、戦前日本社会ならびに大戦への向かい合い方、アメリカのみならず欧米・西洋国家ならびにその文明への向かい合い方、天皇（制）という存在の国家（あるいは世界）存立機構内における位置づけ方（積極的に位置づけない場合も含む）、といった問題にそれぞれが照応すると考えられる。

一方、本研究では戦後の高度成長期以降を主たる時代対象ともしているため、そうした時代状況に応じた指標の設定も必要だろう。社会学者の庄司興吉と宮島喬は「ネオ・ナショナリズム」を提唱し、「主として‘先進’資本主義の‘豊かな社会’で、富と権力と情報力などの世界的な優位を基盤に台頭する意識」であって「庄司編著 1986」、「経済に特化した優越意識が際立っている」「しばしば文化的な独自性に根拠づけて解釈される傾向がある」「国際的な認識に媒介された、責任とか貢献を軸とするナショナルな感情が登場してきている」[宮島 1990]と指摘している。ここからは、経済発展に関する自己認識、文化的独自性や伝統性についての認識、国際化・グローバル化社会において世界人類に対して何をすべきかという認識、といった問題が、ナショナリズムの論理構造に含まれることが看取できる。

以上の文化ナショナリズムについての先行研究の指摘を踏まえると、「①文化・伝統観」、「②天皇観」、「③対人類観」、「④経済的優位観」、「⑤戦前・大戦観」、「⑥欧米・西洋観」の6つを本研究における指標として設定することができる。①・②は、「我々」の独自性・特殊性の主張と根拠に関わる指標であり、こうした文化的独自性・伝統性や天皇の神聖性、皇室の永続性などを、国家意識＝ナショナリズムの論理のなかに組み入れるか入れないか、入れるとしたらどのような形で取り込むかといった点が焦点化されると想定できる<sup>3</sup>。③は、国際化・グローバル化にともなう人の移動や交流の活発化によって醸成された国際貢献意識や日本人の使命感に関する指標であり、④も、戦後高度経済成長ならびにバブル経済を経た日本の状況を念頭においており、いずれも時代状況と関連する指標だといえる。同時に、③は人類に対する意識であることから、普遍主義的な志向との回路ともなりうるし、④は経済的優位性を「我々」の特殊性・優越性の根拠とすることもあれば、逆に経済発展の空虚性を批判する論理の展開も予測される。⑤は、近現代というタイムスパンで見た際の歴史認識に関わる指標であり、戦後に展開した諸思想・諸運動が戦前・大戦をどのように位置づけるのかが、現在のアイデンティティに大きく影響していることが想定される。⑥は、端的に言えば対外認識であるが、同時に西洋文明に自文化・自文明がどう対峙するかといった文明観にもつながっており、自文化・自伝統の特殊性や正統性を説明する際の論理としての動員可能性にも注意を払う必要がある。よって、各指標は独立しているのではなく、相互に関連しうるものであることを想定できる。

以上のような指標を設定することで、ナショナリズム＝国家意識を、単なる愛国的・自文化中心的な言説の寄せ集めとしてではない形で、分析的な比較研究の俎上に乗せることが可能となるように思われる<sup>4</sup>。以降、本研究の第Ⅰ部・第Ⅱ部における指標①～⑥というのはこれらに対応したものである。

以上、本節では、ナショナリズム研究のレビューを行い、まずは安丸の正統／O 異端／H 異端論の活用可能性について検討した。続いて、本研究におけるナショナリズム＝国家意識についての定義を行うとともに、ナショナリズムを分析するために、①文化・伝統観、②天皇観、③対人類観、④経済的優位観、⑤戦前・大戦観、⑥欧米・西洋観の6指標を設定した。

<sup>3</sup> ただし、宗教運動や諸思想のなかには、「世界天皇」観のように、全人類がかつて天皇の統治を受けていた、あるいは統治を受けるべきだと思えるものも存在するのであり、特殊なはずであるの天皇・皇室が、形式的には普遍主義的主張の論理構成要素ともなり得ることは注意が必要である。

<sup>4</sup> なお、筆者はすでに拙稿[塚田 2009a, 2010e, Tsukada 2012d]において、これら6指標を用いた事例研究を行っており、そこにおいて分析概念としての手ごたえがあったことを付記しておく。

### 1-3、新宗教運動におけるナショナリズム研究

次に新宗教運動におけるナショナリズム研究のレビューを行う。

本研究の「はじめに」において、この領域における研究がそれほど多くないことを示唆した。

近現代日本の新宗教についての研究は多岐にわたり、その蓄積も膨大である。その研究の方向性を大まかに分けてみると、まずは教団ごとに歴史や展開を追うもの、教祖の来歴や思想に着目するもの、人々がいかに入信し信者となっていくかに着目するもの、地域ごと（国内・海外）での展開と受容を扱うもの、などが挙げられるだろう〔井上・孝本・對馬・中牧・西山編 1990,1996〕。こうしたそれぞれの研究の大きな柱と柱の間で、新宗教運動がどのような国家意識・国家観を持つのか、どのようなナショナリズムをそなえているのかといった問いは、何のためにそれに注目する必要があるのかという面もあり、それほど前景化することはなかったように思われる。

それはまた、戦前／戦後の区切りにおいても明確な差異を認めることができる。「国家と宗教」という問題系は、むしろ戦前の新宗教運動のケースにおいて、より焦点化されやすいものであった。その場合は、歴史学における民衆宗教研究のように天理教や金光教などの教祖の思想のなかにいかに近代性がそなわっており、それがいかに国家と対峙する可能性を有していた（が結局は絡め取られていった）かということに注目したり、教派神道のように明治国家体制下においていかに公認を得て活動を展開していったかといった面への注目であったり、あるいは戦争に向かうなかで大本やほんみちなどのように独自の国家観を持った運動群がいかに総力戦体制下で弾圧されていったかといった面に注目するものであった。戦前の新宗教運動の研究においては、その国家意識＝ナショナリズムに着目する明確な意義があったのである。

翻って、戦後日本の新宗教運動に目を移そう。戦後日本の国家―宗教関係の基本枠組は、日本国憲法・宗教法人法下での「自由な」宗教活動を認めるものであった。そこでは、対峙すべき国家も特に想定されなかったし、どのような国家観を持っているかも自由であった。確かに、時には、例えば靖国神社国営化法案などをめぐっていくつかの新宗教教団が「右翼」「右派」「反動」「保守」などと（主に革新勢力側から）クローズアップされたり、生長の家＝生長の家政治連合の活動が目立ったりすることはあった〔日隈 1985a,b,1987 ほか〕。だが、高度経済成長を経て安定成長期に入るなかで、新たに立教・伸張した教団群には「国家への関心はほとんどみられなく」、「国家神話」は、その効力を喪失したかにみえる」などと指摘されている〔中牧 1989〕。その実際のところはともかくも、戦後の新宗教への注目とその研究は、いかに教団が発生し大きく展開していくか、どういう人々がどのような動機で入会・入信するのか、どのように地域（国内・海外）へ広がっていくか、などが主たるものだったのであり、ナショナリズム＝国家意識の問題は等閑視されてきたことが確認できるだろう。

また、こうした等閑視には、新宗教運動の世界観の特性も影響していると思われる。新宗教の入口は、多くの場合、「御利益信仰」すなわち現世利益である。新宗教は貧（経済的問題）・病（肉体的問題）・争（人間関係の問題）や生きがい喪失（精神的問題）などの相対的剥奪感に悩む人々に対して、素朴な生活規律に裏打ちされた教えと自己反省的な心直しという倫理的実践、そして簡素で平易な呪術的实践を提供し、その問題解決と補償に役立てたとされる〔塚田 2012b ほか〕。それと同時に、新宗教運動は単なる御利益信仰ではいけないとして、現世利益から入った人々を利他的行為そして運動内の究極的目標（「世界平和」「人類救済」「地上天国の実現」など）に向かわせ引き上げる「システム」をそなえている〔西山 2012〕。それならば、そこにおいて、「ナショナル」な次元とはどう認識され、扱われるのかという疑問が出てくる。最初から「国を救うこと」などを考えて新宗教運動に参画するようなことはあまり想定しにくい。こうした新宗教運動の世界観の構造的な問題として、国家意識＝ナショナリズムの問題が後景化されている側面があるのである。傍証として、例えば 1980 年代までの新宗教研究の集

大成と言える『新宗教事典』の「世界観と救済観」の項では、国家意識＝ナショナリズムの問題は終戦による「立替立直し」の問題が論じられている程度なのである〔井上・孝本・對馬・中牧・西山編 1990：223-236〕。

この問題に有益な道筋を示した数少ない研究が、小島伸之のものである〔小島 2008〕。小島は念法真教の世界観に関する手堅い事例研究から、その救済観とは、自己―家庭―国家―世界―宇宙と段階的に救済を積み上げていく「〈修身齐家治国平天下〉型救済観」「〈救済の積あげ型段階論〉」なのであると指摘した〔同：33-35〕。ここにおいて、救済における国家の次元という問題が明確に焦点化されたのである。本研究においても、この知見を活用し、すなわちそれぞれの宗教運動の教説・思想において、自己救済と世界救済の間にどのような次元の救済が措定されており、とりわけ国家の次元がどのように表出されているかに注目していく。

本研究で事例として扱う教団ごとの先行研究については、各章であらためてレビューするが、新宗教運動におけるナショナリズム研究を一步進めたのが、寺田喜朗である〔寺田 2008,2010〕。寺田は、天照皇大神宮教・佛所護念会教団・世界救世教・創価学会・生長の家を事例に、当該運動のリーダーが発信するナショナリスティックな言説を比較分析した〔同 2010〕。具体的な比較については省略するが、その際に主たる軸として設定されたのが「あるべき日本」←→「現実の日本」という軸である。これを広く捉えて換言すれば、「ユートピア観」についての問題となる。ユートピアとは、「近未来の現世に実現すると信じられている現世超脱的な理想社会」〔西山 1989〕であり、いわば宗教運動とりわけ新宗教運動のほぼ全てが何らかの形で有している理想社会イメージであり最終目標だと言える。詳しくは再び第4章においてレビューするが、西山茂は創価学会の政治進出を論じた論文のなかで、創価学会の最終目標（「国立戒壇」建立）は、「もともと、一般社会の価値基準から著しく乖離していたものであった」としている〔西山 1975〕。前節における6指標は、それ自体は必ずしも宗教運動特有の次元を対象化してはいなかった。その点、ユートピア観とは、各宗教運動の固有世界——それは他の社会運動や一般社会の価値などとは一定の隔たりが想定される——を最も反映したものといえ、そのナショナリズムと政治進出とを考える上で、有効な指標となることが期待される。よって、前節で提示した6指標に、「⑦ユートピア観」を7つめの指標として加え、本研究の各章で検討することとしたい。

以上、本節では、戦後新宗教運動におけるナショナリズムについての研究蓄積が多くないこととその理由について考察するとともに、救済の段階論において国家の次元へ着目することの重要性の指摘と、宗教運動のナショナリズム＝国家意識を捉える際に有効性を発揮するであろう「ユートピア観」の指標としての追加設定を行った。

#### 1-4、新宗教運動の政治活動研究

続いて、新宗教運動の政治活動についての研究状況をつかむ。まずは、再び『新宗教事典』を見てみたい。同事典では、「社会活動」という節のなかに、「政治との交錯」という項目が設けられて、論じられている〔井上・梅津・中野 1990〕。そこで展開されているのは、新宗教運動と政治的運動との関わりの展開史であり、選挙の結果などである。そして、新宗教と政治の関わり方が、①「他教団との連合に参加せず、政治的にも独自の政党を結成して政界進出を図った創価学会」、②「戦後改革を是認する立場から自民党内の比較的リベラルな部分と結び付いて間接的な政界進出を図り、保守政権を支持・支援する新宗連系教団」、③「戦後改革をさほど認めず、自主憲法制定・靖国国家護持賛成・天皇復権などを教団の理念として掲げる、生長の家を筆頭とする右派グループ」、④「教団としての政治参加を基本的に否定する金光教、天理教などのグループ」<sup>5</sup>の4つに整理されている。

<sup>5</sup> なお、政治への非関与型の代表例と言える、金光教の政治的領域への対応の推移は、『戦争と平和―戦

また、学術研究ではないものの、朝日新聞の北畠清泰によるレポートは、充実した内容である。そこでは「政治観の 4 類型」として、「創価学会型」「教義・政策一体型」「イデオロギー色希薄型」「選挙関与拒否型」が提示されている〔朝日新聞社調査研究室 1978〕。

さらに、この分野の重要な先行研究としては、中野毅のものがあげられる〔中野 2003〕。本研究で扱う宗教団体の政治進出については、「第二部 戦後の民衆宗教運動と政治参加」において「戦後日本における新宗教の政治活動」「宗教団体による政治参加—創価学会・公明党を事例として—」として論じている（創価学会＝公明党に関する研究や論考の蓄積については、あらためて第 4 章で扱う）<sup>6</sup>。

このように新宗教運動の政治活動については、一定の先行する成果の蓄積があり、参照力も高いのだが、若干の不満点が二つある。

一つは、どういう政策をどの教団が支持したとか、どの選挙でどれくらいの候補を立てて当選したのか、という論に全体として傾きがちだということである。もちろん、宗教団体の「社会活動」の展開の一環として見るかぎりには、それも無理はないだろう。だが、その団体の持つ世界観、ナショナリズム＝国家意識、ユートピア観などと切り離してしまえば、その政治関与・政治進出の意味は十分に捉えることができないのではないだろうか。

もう一つは、創価学会＝公明党のケースに著しく偏っている点である。確かに、同党は政治進出に「成功」した最大にして前代未聞のケースには違いなく、そのように偏るのも無理がない。しかし、そのケースのみという特殊な事例研究をもって、「宗教団体の政治進出」に関する一般的な議論が可能になるだろうか。創価学会＝公明党のケースをもってして、「創価学会型」という類型を設定する妥当性はどうか。創価学会＝公明党の政治進出のケースと、他の既成政党・候補者を支援するような政治関与型のケースを比べてみても何が明らかになるのだろうか。創価学会＝公明党の事例研究のみでは、「創価学会がなぜ独自の政治進出を行ったか」は明らかになったとしても、「特定の宗教団体がなぜ自前の政治団体をつくってまで、政治進出を行うのか」ということについては明らかになっていないと言えないのである。

以上、本節では新宗教運動の政治活動研究の蓄積について検討し、政治活動と国家意識＝ナショナリズムとの関連を見る必要性と、創価学会＝公明党のケースのみに限定・偏重しない検討の必要性について確認した。

なお、宗教運動の「社会活動」を考える際に、加えて指摘しておきたい論点がある。それは、オウム真理教事件以後、とりわけ 2000 年代中盤以降、注目が高まり、その研究の蓄積も進んでいる、いわゆる「宗教の社会貢献活動」研究に関連するものである。代表的な論集を参照してみると、「宗教の社会貢献」の領域としては、①緊急災害時救援活動、②発展途上国支援活動、③人権・多文化共生・平和運動・宗教間対話、④環境への取り組み、⑤地域での奉仕活動、⑥医療・福祉活動、⑦教育・文化振興・人材育成、⑧宗教的儀礼・行為・救済の 8 つが挙げられている〔稲場・櫻井編 2009 : 41-42〕。ここでは「政治活動」はうまく外されている。他方で同じ論集の中で、戦後仏教者の平和運動の展開を論じた大谷栄一は、「現代日本の宗教集団の社会貢献活動（社会活動）の類型化」として、「サービス系（社会福祉、ボランティア、人道支援、イベント等）」「アクティビズム系（政治活動、社会運動、平和運動等）」「ダイアログ系（宗教間対話、国際・国内会議、国際交流等）」の 3 タイプを挙げている〔大谷 2009 : 112-115〕。ここでは、政治活動とは「アクティビズム系」の「社会貢献活動（社会活動）」と見なされるのである。筆者は何も、本研究で扱うような諸々の政治関与・政治進出が全て「社会貢献活動」とであると主張したいのではない。指摘しておきたいのは、戦後日本の宗教運動による（平和運

---

後 50 年をむかえて—』（金光教本部教庁、1995 年）に詳しい。

<sup>6</sup> その他、学術研究ではないものの、〔肥野 1979〕〔宗教と政治を考える会 1980〕なども、情報量が多く、資料としての参照価値を有している。

動を除く) 政治活動が、なかなか「社会貢献活動」とはみなされにくいという(不)理解の共通基盤が存在するということである。それはなぜなのか。なぜ「宗教団体の政治進出」という「社会活動」が忌避されるのかという問題とともに、具体的な事例研究を通して探ってみたいと考える。

### **1-5、研究課題ならびに検証命題の設定**

以上の先行研究のレビューを踏まえて、本研究の研究課題、ならびに本研究における仮説的な検証命題を設定する。

本研究においては、戦後日本の新宗教運動の持つ国家意識＝ナショナリズムの特徴と、政治活動とりわけ政治進出との関連を明らかにする。

それぞれの宗教運動の国家意識＝ナショナリズムを検討するにあたっては、①文化・伝統観、②天皇観、③対人類観、④経済的優位観、⑤戦前・大戦観、⑥欧米・西洋観、⑦ユートピア観、の7指標に着目し、それらの論理構造や連関構造を取り出して、比較分析を行う。

主な対象であるが、「政治進出」の要因について検討するには、対照的に「政治進出」をせずに「政治関与」を行うケースの検討が前提として不可欠である。よって、まずは「第Ⅰ部 戦後日本の「正統」的宗教ナショナリズムとその周辺」において、神社本庁＝神道政治連盟、日本会議などの保守合同運動、そこに参画する解脱会や崇教真光などの新宗教運動のケースを取り上げて検討する。

続く「第Ⅱ部 宗教団体の政治進出の事例研究」において、独自の政治団体を結成し国政選挙に自前の候補者を擁立して「政治進出」を行なった、創価学会＝公明党、浄霊医術普及会＝世界浄霊会、オウム真理教＝真理党、アイスター＝和豊帯の会＝女性党、幸福の科学＝幸福実現党、の5つのケースを扱い、「政治進出」の論理を比較しながら明らかにする。

新宗教運動の政治進出に関する仮説的な検証命題としては、本章 1～4 節における先行研究などから得られた知見を踏まえ、以下のように設定したい。

- (1) 宗教運動が自前の政治団体を結成し独自の候補を複数擁立する「政治進出」に至るには、その国家意識に関連した形での強い宗教的動機が介在している。
- (2) そうした場合、当該運動は既成政党とその候補を支援するような順体制的な枠に留まらないという点で、戦後の「正統」的宗教ナショナリズムに収斂しえない「H 異端」性を具えている。
- (3) そうした場合、そこにはその運動に独特のユートピア観が存在する。

もちろんこの3点は、仮説的な検証命題であるから、対象とする事例において全て当てはまる必要はない。当てはまらない場合には、その要因を考察し、検証しつつ適宜修整していけばよいのである。

研究に際して用いる資料・データについては、各章で詳しく提示する。全体としては、筆者が収集した文献資料を中心としており、補足的にフィールドワークならびに聞き取り調査によって得られたデータを用いている。

以上を念頭において、次章以降、事例研究を進める。

## 第 I 部

### 戦後日本の「正統」的宗教ナショナリズムとその周辺

## 第2章 宗教運動と保守合同運動

(塚田穂高『宗教と政治の転轍点—保守合同と政教一致の宗教社会学—』(花伝社、2015年)  
「第2章 戦後日本の保守合同運動」(32-71頁)として出版)

第3章 真光のナショナリズムと運動展開  
—靈的日本中心主義・皇室崇敬・超伝統性—

(塚田穂高『宗教と政治の転轍点—保守合同と政教一致の宗教社会学—』(花伝社、2015年)  
「第3章 保守合同運動と新宗教運動」(72-107頁)として出版)



## 第Ⅱ部

### 宗教団体の政治進出の事例研究

第4章 創価学会＝公明党  
―王仏冥合論と国立戒壇論からの政治進出―

(塚田穂高『宗教と政治の転轍点―保守合同と政教一致の宗教社会学―』(花伝社、2015年)  
「第4章 創価学会＝公明党―基点としての王仏冥合・国立戒壇建立―」(110-160頁)  
として出版)

第5章 浄霊医術普及会＝世界浄霊会  
―浄霊普及・政治進出・地上天国―

(塚田穂高『宗教と政治の転轍点―保守合同と政教一致の宗教社会学―』(花伝社、2015年)  
「第5章 浄霊医術普及会＝世界浄霊会―浄霊普及、神意としての選挙戦―」(161-196頁)  
として出版)

第6章 オウム真理教＝真理党  
—シャンバラ化の夢想、ハルマゲドンの回避と政治進出—

(塚田穂高『宗教と政治の転轍点—保守合同と政教一致の宗教社会学—』(花伝社、2015年)  
「第6章 オウム真理教＝真理党—シャンバラ化の夢想、ハルマゲドンの回避—」(197-247頁)  
として出版)

第7章 アイスター＝和豊帯の会＝女性党  
―化粧品販売から宗教、そして「新しい女性の時代」を目指す政治へ―

(塚田穂高『宗教と政治の転轍点―保守合同と政教一致の宗教社会学―』(花伝社、2015年)  
「第7章 アイスター＝和豊帯の会＝女性党―「新しい女性の時代」のために―」(248-288頁)  
として出版)

第8章 幸福の科学＝幸福実現党（1）  
―宗教ナショナリズムの原型と運動展開―

（塚田穂高『宗教と政治の転轍点―保守合同と政教一致の宗教社会学―』（花伝社、2015年）  
「第8章 幸福の科学＝幸福実現党―選ばれた日本、ユートピア建設の理想と現実―」（289-372頁）  
として出版）

第9章 幸福の科学＝幸福実現党 (2)  
―宗教立国のための政治進出とその展開―

(塚田穂高『宗教と政治の転轍点―保守合同と政教一致の宗教社会学―』(花伝社、2015年)  
「第8章 幸福の科学＝幸福実現党―選ばれた日本、ユートピア建設の理想と現実―」(289-372頁)  
として出版)

## 結論

(塚田穂高『宗教と政治の転轍点—保守合同と政教一致の宗教社会学—』(花伝社、2015 年)  
「結章 宗教と政治と「私たち」の課題」(373-388 頁)  
として出版)



## 参考文献一覧

- 足立利昭 1969『太陽と潮—たたかう公明党の記録—』大和書房。
- アエラ編集部 1996『創価学会解剖』朝日出版社。
- アンダーソン, B. 1997『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』(白石隆・白石さや訳) NTT 出版。
- アンダーソン, リチャード W. 1994 (1988)『体験—ニッポン新宗教の体験談フォークロア—』(土岐隆一郎・藤堂憶斗訳) 現代書館。
- 有田芳生 1980a「「公明」選挙の黒い実像」『文化評論』1980年9月(233)号: 71-80。
- 有田芳生 1980b「初公開資料にみる政教一致」『文化評論』1980年12月(236)号: 128-139。
- 有田芳生 1985『現代公明党論』白石書店。
- 有田芳生 1991『「幸福の科学」を科学する—大川隆法の宗教?—』発売; 大陸書房、発行; 天山出版。
- 朝日新聞社調査研究室 1978『宗教団体の選挙活動—その現状と今後—』朝日新聞社。
- Astley, Trevor, “The Transformation of a Recent Japanese New Religion: Ōkawa Ryūhō and Kōfuku no Kagaku”. *Japanese Journal of Religious Studies* 22/3-4 (Fall 1995), pp. 343-380, 1995.
- Baffelli, Erica. “Mass Media and Religion in Japan: Mediating the Leader’s Image.” *Westminster Papers in Communication and Culture* 14: 1 (2007): pp. 83-99, 2007.
- Baffelli, Erica. “Kofuku no Kagaku”. In *Establishing the Revolutionary: An Introduction to New Religions in Japan*, eds. Birgit Staemmler, Ulrich M. Dehn, pp. 259-276. LIT Verlag Munster, 2011a.
- Baffelli, Erica. “Charismatic Blogger?: Authority and New Religions on the Web 2.0.” In *Japanese Religions on the Internet: Innovation, Representation and Authority*, eds. Erica Baffelli, Ian Reader and Birgit Staemmler, pp. 118-135. Routledge, 2011b.
- Baffelli, Erica & Reader, Ian. “Competing for the Apocalypse: Religious Rivalry and Millennial Transformations in a Japanese New Religion” *International Journal for the Study of New Religions* 2-1, 2011: pp.5-28c.
- 別冊宝島編 1995『となりの創価学会—内側から見た「学会員という幸せ」— (別冊宝島 225)』宝島社。
- ベセル, D. M. 1974 (1973)『価値創造者—牧口常三郎の教育思想—』中内敏夫・谷口雅子訳、小学館。
- Broder, Anne. “Mahikari in Context” *Japanese Journal of Religious Studies* 35/2 (2008): 331-362.
- 文藝春秋編 1991「大川隆法インタビュー「宗教界は企業努力が足りない」」『文藝春秋』1991年8月号: 330-335。
- Cornille, Catherine. “The Phoenix Flies West: The Dynamics of the Inculturation of Mahikari in Western Europe” *Japanese Journal of Religious Studies* 18/2-3, 1991.
- Cornille, Catherine. “Jesus in Japan: Christian syncretism in Mahikari.” In *Japanese New Religions in the West*, Peter B. Clark and Jeffrey Somers, eds., pp. 89-103. Sandgate, Folkestone, Kent: Japan Library, 1994.
- Cornille, Catherine. “Nationalism in New Japanese Religions.” *Nova Religio* 1999.
- Cornille, Catherine. “New Japanese Religions in the West, Between Nationalism and Universalism.” In Clarke, P.B., ed., *Japanese New Religions in Global Perspective*. Richmond: Curzon Press, 2000.
- Davis, Winston. *Dojo, Magic and Exorcism in Modern Japan*, Stanford University Press, 1980
- Dessi, Ugo. “Religion, Hybrid Forms, and Cultural Chauvinism in Japan.” *Journal of Religion in Japan* 1, 2012: pp.168-187.
- エアハート, B. 1983(1980)a「解脱会員の信仰生活史」鳥井由紀子訳、エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、311-335。
- エアハート, B. 1983(1980)b「日本宗教史における解脱会—新宗教形成の理論をめざして—」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、337-359。
- エアハート, H. B. 1994「根岸氏の生活史」「根岸氏の生活史の解釈」『日本宗教の世界—一つの聖なる道—』岡田重精・新田均共訳、196-211、212-216。
- エアハート, B.・宮家準編 1983『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版。
- 江川紹子 1991「「幸福の科学」の幸福な経営—急膨張する教団が説く「富は善、強き者は善」—」『文藝春秋』1991年8月号: 316-329。
- 江川紹子 1995「衆議院選挙に出馬」『「オウム真理教」追跡 2200 日』文藝春秋、114-121 (初出: 1990「衆院選大量出馬は何のためか?—オウム『真理党』25人の意外な過去—」『週刊文春』1990年1月25日号)。
- Fisker-Nielsen, Anne Mette 2012 *Religion and Politics in Contemporary Japan: Soka Gakkai Youth and Komeito*, Oxon: Routledge.
- 藤井健志 1983「教祖・岡野聖憲の思想形成」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の

- 思想と行動―』名著出版、1-78。
- 藤本龍児・塚田穂高 2012「政治と宗教―現代日本の政教問題―」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著『宗教と社会のフロンティア―宗教社会学からみる現代日本―』勁草書房、197-218。
- 藤田庄市 1995『オウム真理教事件』ASAHI NEWS SHOP。
- 藤田庄市 2008a「確信の宗教殺人―オウム真理教―」『宗教事件の内側―精神を呪縛される人びと―』岩波書店、165-291。
- 藤田庄市 2008b「「政」へ従属した教団選挙―日本の政治と宗教の30年―」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2008』平凡社、156-167。
- 藤田庄市 2011「オウム真理教事件の源流―シャンバラ王国幻想から無差別大量殺人への道程―」宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』春秋社、19-54。
- 藤原弘達 1970（1969）『この日本をどうする・2―創価学会を斬る（第7版）―』日新報道。
- 藤原弘達・内藤国夫 1979『創価学会に未来はあるか―「興」から「亡」へ動き出した巨大集団の実相―』日新報道。
- 藤原弘達 1985『創価学会・公明党をブッた斬る―いま、なぜこの悪質な組織の欺瞞性を問題にするか―』日新報道。
- 藤原弘達 1988『創価学会・池田大作をブッた斬る』日新報道。
- 降旗賢一 2000『オウム裁判と日本人』平凡社新書。
- ゲルナー、E. 2000『民族とナショナリズム』（加藤節訳）、岩波書店。
- 現代セラニティ研究会編 1992『「幸福の科学」現象を追う―新時代の啓示宗教―』毎日新聞社。
- 言論・出版の自由にかんする懇談会編 1970『公明党・創価学会の言論抑圧問題』飯塚書店。
- 後藤弘 1970『創価学会の経営学的分析』開発社。
- 後藤洋文 1975「S教団盛岡道場素描―入信の周辺を中心に―」大正大学宗教学会『宗教学年報』20:35-43。
- 後藤洋文 1978a「非都市的社会の新宗教―世界真光文明教団・地方道場の場合―」宗教社会学研究会編『現代宗教への視角』雄山閣、98-111。
- 後藤洋文 1978b「世俗社会の奇跡宗教―世界真光文明教団―」『国際宗教ニーズ』16・3・4：21-30。
- 後藤洋文 1987「新・新宗教における先祖祭祀」『真理と創造』27・28：63-70。
- グループ21宗政フォーラム 1999『「自・公」政権を問う―危機に立つ政治と宗教―』仏教タイムス社。
- ハモンド、Ph.&マハチェク、D. 2000（1999）『アメリカの創価学会―適応と転換をめぐる社会学的考察―』紀伊國屋書店。
- 長谷川学 1995「アイレディース化粧品で有名な訪販業者が参院選でみせた 選挙出馬のテクニック」『財界展望』1995年9月号：188-191。
- 畑中幸子 1987『現代のこころ 崇教真光』旺文社。
- 畑中幸子 1993「真光教団の成立」『アカデミア（人文・社会科学編）』57：7-29。
- 早川和廣 1991『大川隆法の正体』アイベックプレス。
- 早川紀代秀・川村邦光 2005『私にとってオウムとは何だったのか』ポプラ社。
- 林郁夫 2001『オウムと私』文春文庫。初出：19980930、文藝春秋。
- 日隈威徳 1971『戸田城聖―創価学会―』新人物往来社。
- 日隈威徳 1985a「反動化の波に抗して」『宗教と共産主義』新日本新書、157-182。
- 日隈威徳 1985b「或る右派教団の軌跡―生長の家の「教義」と運動―」『宗教と共産主義』新日本新書、93-156。
- 日隈威徳 1987「右派教団の政治的ジレンマと谷口雅春の死―生長の家―」『歴史読本 臨時増刊 特集：世界謎の宗教団体』新人物往来社、62-69。
- ヒル、ナポレオン 1977（1972）『成功哲学―やる気と自信がわいてくる―』柳平彬監修、産能大学出版部。
- 肥野仁彦 1979『神と仏と自民党―80年代政権構想と「宗政研」―』徳間書店。
- ひろたみを 1989「世界真光文明教団」『につぼん 新・新宗教事情』日本文芸社、235-255。
- 堀幸雄 1983「最近の右傾化と右翼の戦略」『戦後の右翼勢力』勁草書房、219-243。
- 堀幸雄 1999『公明党論』南窓社。（本書は2000年2刷。原著は1973年同名、青木書店）
- 堀幸雄 2006「日本を守る会」「日本を守る国民会議」『最新 右翼事典』柏書房、490-491。
- 生駒孝彰 1993「幸福の科学の宇宙観」『現代社会と新宗教』本願寺、79-83。
- 稲場圭信・櫻井義秀編 2009『社会貢献する宗教』世界思想社。
- 猪野健治 1972「世界真光文明教団―「奇跡」を約束する御神示宗教―」猪野健治・梅原正紀・清水雅人『民衆宗教の実像―十二人の教祖たち―』月刊ペン社、171-186。
- 井上順孝・梅津礼司・中野毅 1990「政治との交錯」井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、562-570。
- 井上順孝 1997「〈新新宗教〉概念の学術的有効性について」『宗教と社会』3：3-24。

- 井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編 1990『新宗教事典』弘文堂。
- 井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編 1996『新宗教教団・人物事典』弘文堂。
- 井上順孝編 2005『現代宗教事典』弘文堂。
- 井上順孝編集責任 2013『第 11 回学生宗教意識調査報告』2012 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」・國學院大學日本文化研究所。
- いのうえせつこ 1993「若者たちと幸福の科学」『新興宗教ブームと女性』新評論、136-170。
- 板井俊介 2006「勝利と和解が成立 労働者 21 名全員勝利の報告—アイレディース宮殿黒川温泉ホテル解雇事件—」『季刊・労働者の権利』263：55-59。
- 石田郁夫 1965『創価学会—戦後民衆の思想とエネルギー—』三一書房。
- 石井研士 1983a「解脱会の形成と現状」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、79-123。
- 石井研士 1983b「会員の意識と行動—質問紙調査による—」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、227-273。
- 石井研士 1983c「米国解脱教会—日系新宗教の受容—」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、361-407。
- 石井研士編 2011『世論調査による日本人の宗教性の調査研究』（平成 20 年度～22 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書）。
- 石井清司 1979「生長の家—右翼集票マシンと化した雑炊宗教—」『現代の眼』1979 年 11 月号：130-137。
- 石川元 1979「「真光教」の体験的理解」『臨床精神医学』8・9：59-66。
- 石川元 1991「「真光教」の体験的理解 その顛末」『現代のエスプリ』292 宗教・オカルト時代の心理学』至文堂、85-101。
- 石川真澄・山口二郎 2010『戦後政治史 第 3 版』岩波新書。
- 磯岡哲也・梅津礼司 1990「既成宗教との連合」井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、598-606。
- ユルゲンスマイヤー, M. 1995『ナショナリズムの世俗性と公共性』（阿部美哉訳）玉川大学出版部。
- 柿田睦夫 1990「オウム教と統一協会—選挙の決算—」『文化評論』350：202-204。
- 上之郷利昭 1995「陸軍中佐岡田良一を襲った「真光」の啓示」『教祖誕生』講談社文庫、9-32。
- 神山光編 1999『創価学会の体質をあばく！—仕掛けられた罠 墓地・納骨をめぐる謀略訴訟—』仏教タイムス社。
- 笠原一男 1964『革命の宗教—一向一揆と創価学会—』人物往来社。
- 笠原一男 1965『政治と宗教—岐路に立つ創価学会—』あそか出版社。
- 笠原一男 1970『創価学会と本願寺教団—民衆宗教の体質—』新人物往来社。
- 笠原一男 1976「解脱会 教統岸田英山」『現代人と仏教』評論社、282-302。
- 榎尾直樹 1996「現代フランス都市と新宗教運動—パリ MAHIKARI の事例—」寺尾誠編『都市と文明』ミネルヴァ書房、240-258。
- 榎尾直樹 1999「宗教的接続可能性の基礎概念—新宗教の『民俗性』に関する宗教民俗学的一考察—」宮家準編『民俗宗教の地平』春秋社、533-565。
- 榎尾直樹 2004「スピリチュアリティ、ある〈つながり〉の感覚の創出—フランス日系宗教の事例—」伊藤雅之・榎尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求—』世界思想社。
- 河東仁 1983a「解脱会の儀礼」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、125-147。
- 河東仁 1983b「解脱会の宗教的宇宙観」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、149-185。
- 河東仁 1983c「解脱会の修行」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、187-226。
- 桐ヶ谷章 1995「宗教団体の政治活動—政教分離原則の意味—」『東洋学術研究』34-1：53-79。
- 木谷八士 1970『疑惑のなかの公明党—出版妨害と創価学会の体質を追う—』新日本出版社。
- Klein, Axel. “Wenn Religionsgemeinschaften zur politischen Reformation ansetzen: Der Fall der japanischen, Kōfuku no kagaku, Asien. *The German Journal on Contemporary Asia* 119: 9-26, 2011.
- クネヒト・ペトロ 1993「啓示の条件—十字に秘められた事—」『アカデミア（人文・社会科学編）』57：31-53。
- Knecht, Peter, “The crux of the cross, Mahikari’s core symbol.” *Japanese Journal of Religious Studies* 22/3-4, 1995.
- 小林正巳 1969『池田大作』旺文社新書。
- 小島伸之 2008「念法真教における他力と自力、個人救済と世界救済—その災因論と救済論—」西山茂（研

- 究代表者)『現代日本における人生問題の解釈と解決に関する宗教戦略の比較研究』(平成 18-19 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書)、11-38。
- 子安宣邦 2007『日本ナショナリズムの解説』白澤社。
- 熊谷一乗 1978『牧口常三郎』レグルス文庫。
- 久米晶文 2012『酒井勝軍—「異端」の伝道者—』学研。
- 黒羽文明 1997「検証異色集団を斬る(10) 宗教法人「崇教真光」—宗門、人種を問わず、「真光の業」で人類救済—」『政界』19-12: 114-118。
- 黒羽文明 1998「検証異色集団を斬る(19) 宗教法人「世界真光文明教団」—古傷を癒し沈静を保つ本家本元「手かざし」教団—」『政界』20-9: 98-102。
- 毎日新聞社編 1969『“公明党政権” 下の安全保障—国会方式 70 年への質問戦—』毎日新聞社。
- 真鍋祐子 1992a『『脱近代』的新宗教の諸相—大川隆法と『幸福の科学』をめぐる—』筑波大学大学院社会科学部 1991 年度中間論文。
- 真鍋祐子 1992b「現代の至高者神話—大川隆法と『幸福の科学』をめぐる—」『日本学誌』12。
- 真鍋祐子 1992c「近代」をめぐる新・新宗教の一考察—もうひとつの応答形式としての「幸福の科学」—」『年報筑波社会学』4: 11-35。
- 丸山真男 1964『増補版 現代政治の思想と行動』未来社。
- Matsunaga, Louella. "Spirit First, Mind Follows, Body Belongs: Notions of health, illness, and disease in Sukyo Mahikari UK." In Clarke, P.B., ed., *Japanese New Religions in Global Perspective*, pp. 198-239. Richmond: Curzon Press. 2000.
- Matsunaga, Louella. "Sekai Mahikari Bunmei Kyodan and Sukyo Mahikari". In *Establishing the Revolutionary: An Introduction to New Religions in Japan*, eds. Birgit Staemmier, Ulrich M. Dehn, pp. 239-258. LIT Verlag Munster, 2011.
- McVeigh, Brian. "The Vitalistic Conception of Salvation as Expressed in Sukyo Mahikari", *Japanese Journal of Religious Studies* 19: 1 (1992a): 41-68.
- McVeigh, Brian. "The Master Metaphor of Purity: The Symbolism of Authority and Power in Sūkyō Mahikari." *Journal of Ritual Studies* 6:2 (1992b): 39-58.
- McVeigh, Brian. "Building Belief Through the Body: The Physical Ebodiment of Morality and Doctrine in Sūkyō Mahikari." *Japanese Religions* 18/2 (1993): pp. 140-161.
- McVeigh, Brian. "Learning morality through sentiment and the senses: the role of emotional experience in Sūkyō Mahikari." *Japanese Religions* 20/1 (1995): pp. 56-76.
- McVeigh, Brian J. "Spirit Possession in Sukyo Mahikari: A Variety of Sociopsychological Experience." *Japanese Religions* 21/2 (1996): pp. 283-297.
- McVeigh, Brian J. *Spirits, Selves, and Subjectivity in a Japanese New Religion: The Cultural Psychology of Belief in Sūkyō Mahikari*. Lewiston, New York: Edwin Mellen Press, 1997.
- McVeigh Brian J. *Nationalisms of Japan: Managing and Mystifying Identity*, Rowman & Littlefield, 2006a.
- McVeigh Brian J. "Mainstream and Marginal Nationalism: The Paradox of "Japaneseness" in the Mahikari Religious Movement." In *Nationalisms of Japan*, Rowman & Littlefield, 2006b: pp.240-256.
- 宮島喬 1990「ネオ・ナショナリズムと対外意識」古城利明編『世界社会のイメージと現実』東京大学出版会、219-236。
- 宮家準 2002「伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—」『民俗宗教と日本社会』東京大学出版会、243-262。
- 宮永國子 1980「現代に生きる憑依と憑抜の論理—世界真光文明教団の場合—」宗教社会学会編『宗教の意味世界』雄山閣、117-138。
- Miyanaga, Kuniko. *Social reproduction and transcendence: an analysis of the Sekai Mahikari Bunmei Kyōdan, a heterodox religious movement in contemporary Japan*. PhD Dissertation, University of British Columbia, 1983.
- 宮永國子 1989「必然に閉じ込められた変革—儀礼の強制力に関する一考察—」田辺繁治編『人類学的認識の冒険—イデオロギーとプラクティス—』同文館出版、275-299。
- 宮坂清 2009「シャンバラへの旅—80 年代日本の危うい夢—」吉田司雄編著『オカルトの惑星—1980 年代、もう一つの世界地図—』青弓社、111: 132。
- 宮田幸一 1993『牧口常三郎の宗教運動』第三文明社。
- 宮田光雄 1965「宗教政党と民主主義」『世界』1965 年 5 月号。
- 宮田光雄 1973「祖国のための死とは何か」『朝日ジャーナル』1973 年 7 月 27 日号。
- 宮田光雄 1981『日本の政治宗教—天皇制とヤスクニ—』朝日選書。
- 溝口敦 2005 (1981)『池田大作「権力者」の構造』講談社+α 文庫。
- マリンス、マーク。2005 (1998)『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』高崎恵訳、トランスビュー。

- 村上重良 1967『創価学会＝公明党』青木書店。
- 村上重良編著 1969『日本の政党Ⅲ 公明党』新日本新書。
- 村上重良 1970『国家神道』岩波新書。
- 永井美紀子 2007「岡野聖憲」井上順孝編『近代日本の宗教家 101』新書館、42-43。
- 内藤国夫 1969『公明党の素顔—この巨大な信者集団への疑問—』エール出版社。
- 央忠邦・浅野秀満 1972『アメリカの日蓮正宗』仙石出版。
- 中林伸浩 1993「岡田光玉の言霊—語呂合せと文字についての一考察—」『アカデミア（人文・社会科学編）』57：55-96。
- 中林伸浩 1999「新宗教の日本イメージ」青木保・梶原影昭『情報社会の文化 1 情報化とアジア・イメージ』東京大学出版会、173-196。
- 中牧弘允 1989「国家と教団—国家観と国際化をめぐる—」中牧弘允編『現代日本文化における伝統と変容 5 現代日本の“神話”』ドメス出版、92-102。
- 中野毅・飯田剛史・山中弘編 1997『宗教とナショナリズム』世界思想社。
- 中野毅 2003a『戦後日本の宗教と政治』大明堂。
- 中野毅 2003b「仏教教団による新しい形態の政治参加」『東洋哲学研究所紀要』19：59-84。
- 中野毅 2010「民衆宗教としての創価学会—社会層と国家との関係から—」『宗教と社会』16：111-142。
- 縄田早苗 1976「神様のみことばにも著作権はあるか」松野純孝・清水雅人編『別冊・現代宗教 日本の民衆宗教』エヌエス出版、145-159。
- 縄田早苗 1979「宗教と政治」清水雅人・梅原正紀・高木宏夫・宮田登・縄田早苗・小野泰博『新宗教の世界 I—新宗教の諸問題—』大蔵出版、135-187。
- 21 世紀文明研究会編著 1991『これが「幸福の科学」だ!!—教えのすべてがわかる本—』アクア出版。
- 21 世紀宗教と政治研究会編 2005『宗教と集票—創価学会の実像—』仏教タイムス社。
- 21 世紀宗教と政治研究会編 2008『創価新体制の行方—品格なき政教関係—』仏教タイムス社。
- 21 世紀宗教と政治研究会編 2010『与党末期の創価学会・公明党』仏教タイムス社。
- 日本ルーテル神学大学教職神学セミナー編 1994『「神々」の時代を問う—キリスト教と新々宗教—』キリスト教視聴覚センターAVACO。
- 西山茂 1975「日蓮正宗創価学会における「本門戒壇」論の変遷—政治的宗教運動と社会統制—」中尾堯編『日蓮宗の諸問題』雄山閣、241-275。
- 西山茂 1978a「教義解釈の変容をめぐる—仏教教団の葛藤過程—日蓮正宗における妙信講問題の事例—」桜井徳太郎編『日本宗教の複合的構造』弘文堂、383-416。
- 西山茂 1978b「少数派講中の分派過程—日蓮正宗妙信講の事例—」宗教社会学研究会編『現代宗教への視角』雄山閣、112-128。
- 西山茂 1980「創価学会」五来重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田登編『講座・日本の民俗宗教 5 民俗宗教と社会』弘文堂、255-267。
- 西山茂 1986「正当化の危機と教学革新—「正本堂」完成以後の石山教学の場合—」森岡清美編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房、263-299。
- 西山茂 1988「日蓮主義の展開と日本国体論—日本の近・現代における法華的国体信仰の軌跡—」孝本貢他編『論集日本仏教史 9 大正・昭和時代』雄山閣、135-162。
- 西山茂 1989「宗教運動におけるユートピアとエクスタシーの相関—仏立講・国柱会・創価学会の事例比較—」中牧弘允編『現代日本の“神話”』ドメス出版、152-170。
- 西山茂 1991「霊術系新宗教の現在と将来」『G - TEN』59：38-46。
- 西山茂 1995「新宗教の特徴と類型」山下袈裟男監修『日本社会論の再検討—到達点と課題—』未来社、147-168。
- 西山茂 1997「「(新)新宗教」概念の学術的有効性について」へのリプライ『宗教と社会』3：25-29。
- 西山茂 1998「内棲宗教の自立化と宗教様式の革新—戦後第二期の創価学会の場合—」沼義昭博士古稀記念論文集『宗教と社会生活の諸相』隆文館、113-141。
- 西山茂 2004「変貌する創価学会の今昔」『世界』727(2004 年 6 月号)：170-181。
- 西山茂 2012「日本の新宗教における自利利他連結転換装置」『東洋学研究』49：49-59。
- 野田成人 2010『革命か戦争か—オウムはグローバル資本主義への警鐘だった—』サイゾー。
- 野澤明一 1986「私は神の操り人形」前田博編著『日本の霊能者』株式会社コア、195-212。
- 沼田健哉 1990「幸福の科学の研究」桃山学院大学『社会学論集』24・2：81-112 (→沼田健哉 1995「幸福の科学の研究」『宗教と科学のネオパラダイム—新新宗教を中心として—』創元社、180-245)。
- 尾堂修司 1994「「霊術系新宗教」の再検討」『西日本宗教学雑誌』16：92-100。
- 尾堂修司 1995「崇教真光における信仰の段階」坂井信生・竹沢尚一郎編『西日本の宗教運動の比較研究 2』80-104。
- 小熊英二 2002「〈民主〉と〈愛国〉—戦後日本のナショナリズムと公共性—」新曜社。

- 小熊英二・上野陽子 2003『〈癒し〉のナショナリズム』慶應義塾大学出版会。
- 岡田浩樹 1993「儀礼と組織—道場における手かざし儀礼—」『アカデミア（人文・社会科学編）』57：97-148。
- 小沼優子 1983「解脱会の救済の論理」エアハート, B.・宮家準編『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』名著出版、275-310。
- 大原康男 2010「神社と政治」神社新報創刊六十周年記念出版委員会編『戦後の神社・神道—歴史と課題—』神社新報社、33-105。
- 大久保雅行 1997『宗教人類学入門—新宗教における文化変容の研究—』私家版。
- 大西克明 2009『本門佛立講と創価学会の社会学的研究—宗教的排他性と現世主義—』論創社。
- 大野正男 1986（（宗）世界真光文明教団代表役員地位確認請求事件—教義に関する事項を含む紛争について裁判所の審査権はどこまで及ぶか—）『宗教法』5：25-42。
- 大澤真幸 2007『ナショナリズムの由来』講談社。
- 大谷栄一 2001『近代日本の日蓮主義運動』法蔵館。
- 大谷栄一 2009「平和をめざす宗教者たち—現代日本の宗教者平和運動—」稲場圭信・櫻井義秀編 2009『社会貢献する宗教』世界思想社、108-132。
- 大内義郷 1984『神代秘史資料集成 解題』八幡書店。
- Reader, Ian, "Identity and Nationalism in the "New" New Religions; Buddhism as a motif for the New Age of Japan." In *Religion and National Identity in the Japanese Context*, eds. Hiroshi Kubota, Klaus J. Antoni, Johann Nawrocki, pp, 13-36. University of Tübingen, 2002.
- ルオフ, ケネス, J. 2003 (2001)『国民の天皇—戦後日本の民主主義と天皇制—』(高橋紘監修、木村剛久・福島睦男訳) 共同通信社。
- 坂口義弘 1992「アイスター—会長は教祖様。キャンペーンのくり返しで金集め—」『マルチ疑惑の訪販 16 社—マルチ商法か販売革命か—』あつぷる出版社、151-161。
- 佐木秋夫・小口偉一 1957『創価学会』青木書店。
- 眞田芳憲 2001「立正佼成会の政治理念と政治浄化活動」『中央学術研究所紀要』30：26-92。
- 産経新聞社編 19950516『緊急スペシャル 麻原オウム大崩壊』産業経済新聞社。
- Schrimpf, M. 2008 "Nationale Selbstbehauptung in neuen religiösen Bewegungen in Japan : das Beispiel Kōfuku no Kagaku." *Marburg Journal of Religion* 13-1 (頁数なし)。
- 清家久美 1995「「幸福の科学」—《モダン》の宗教—」坂井信生・竹沢尚一郎編『西日本の新宗教運動の比較研究 2』、52-79。
- 政教関係を正す会編 1993・2002・2011『実例に学ぶ「政教分離」—こんなことまで憲法違反？—（正・続・新）』展転社。
- 七里和乗 1980『創価学会はどこへ行く』新日本出版社。
- 島田裕巳 1992『神サマのつごう—終末のフィールドワーカー』法蔵館。
- 島蘭進 1992『新新宗教と宗教ブーム』岩波ブックレット。
- 島蘭進 1993「コスモメイトと幸福の科学—自己主張的「神道」ナショナリズムと新新宗教—」『別冊宝島 EX 神道を知る本』宝島社、151-154。
- 島蘭進 1995a「オウム真理教の信仰世界」『へるめす』56：59-68
- 島蘭進 1995b『オウム真理教の軌跡』岩波ブックレット。
- 島蘭進 1995c「日本人論と宗教—国際化と日本人の国民的アイデンティティ—」『東京大学宗教学年報』13：1-16。
- 島蘭進 1996『岡田茂吉全集「著述篇」第8巻 解説』岡田茂吉研究』14（岡田茂吉全集 著述篇 第8巻付録）：18-28。
- 島蘭進 1997a「現代日本の反世俗主義とナショナリズム」中野毅・飯田剛史・山中弘編『宗教とナショナリズム』世界思想社、217-235。
- 島蘭進 1997b「時代の兆候を読みとる—ある時期の運動の集合体を「新新宗教」とよぶ意義—」『宗教と社会』3：30-36。
- 島蘭進 1997c『現代宗教の可能性—オウム真理教と暴力—』岩波書店。
- 島蘭進 2000「新新宗教（後期新宗教）の政治意識—世俗主義と反世俗主義のせめぎあいの中で—」『東洋学術研究』39-1：169-190。
- 島蘭進 2001『ポストモダンの新宗教—現代日本の精神状況の底流—』東京堂出版。
- 島蘭進 2006「戦後の国家神道と宗教集団としての神社」圭室文雄編『日本人の宗教と庶民信仰』吉川弘文館、482-504。
- 島蘭進 2010『国家神道と日本人』岩波新書。
- 清水雅人 1985「終末観に彩られる第3次宗教ブーム 崇教真光・阿含宗・GLAの新しさとは何か」『朝日ジャーナル』1985年9月20日号：104-107。

- 清水雅人 1986「神秘主義的な伝統回帰」『世紀末の宗教 破滅を救う〈霊界〉曼陀羅』陵北出版、101-114。
- 清水雅人 1994「崇教真光」清水雅人編『新宗教時代 2』大蔵出版、223-280。
- 「しんぶん赤旗」特別取材班 2000『政教一体 公明党・創価学会 政権参加を問う 3』新日本出版社。
- 神道政治連盟編 1979,1984,1990,1990,1995,2000,2005『神政連十年史』『神政連十五年史』『神政連二十年史』『神政連のあゆみ—戦後の精神運動の柱として—』『神政連二十五年史』『神政連三十年史』『神政連三十五年史』神道政治連盟。
- 庄司興吉編著 1986『住民意識の可能性—「国際化」時代のまちづくりと日本人の社会意識—』梓出版。
- 宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集 2011『情報時代のオウム真理教』春秋社。
- 宗教と政治を考える会 1980『神と仏と選挙戦—大宗教教団の政治戦略—』徳間書店。
- スミス、A・D. 2007『選ばれた民—ナショナル・アイデンティティ、宗教、歴史—』（一條都子訳）青木書店。
- 総本山御寺泉涌寺編集・赤松俊秀監修 1984『泉涌寺史』（本文篇・資料編）法蔵館。
- Starrs, Roy (ed.) (2011) *Politics and Religion in Modern Japan: Red Sun, White Lotus*, Houndmills: Palgrave Macmillan.
- 杉森康二 1976『研究・創価学会』自由社。
- 杉山幸子 2004『新宗教とアイデンティティ—回心と癒しの宗教社会心理学—』新曜社。
- 鈴木広 1970『都市的世界』誠信書房。
- 高橋典史・山本佳世子 2012「日本における宗教教育の歴史とその課題」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔 編著『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』勁草書房、219-237。
- 高瀬広居 1962『第三文明の宗教—創価学会のめざすもの—』弘文堂。
- 高瀬広居 1964『《ドキュメント》公明党—その戦歴と未来像—』学習研究社。
- 武田道生 1992「異文化への宗教の展開—崇教真光北米方面の場合—」『佛教文化研究』37: 107-122。
- 竹中信常 1967『創価学会—その性格と活動—』労働法学出版株式会社。
- 玉野和志 2008『創価学会の研究』講談社現代新書。
- 種田博之 1993「「幸福の科学」の急成長についての一考察—「幸福の科学」の特性とそのアンビバレンス—」『年報人間科学』14: 31-46。
- 谷富夫 1987「神秘から宗教へ—真光に集う若者たちの世界—」畑中幸子編『現代のこころ—崇教真光—』旺文社、107-116。
- 谷富夫 1993「新宗教青年層における呪術性と共同性—崇教真光を事例として—」『アカデミア（人文・社会科学編）』57。
- 寺田喜朗 2008「新宗教とエスノセントリズム—生長の家の日本中心主義の変遷をめぐって—」『東洋学研究』45: 179-208。
- 寺田喜朗 2010「戦後新宗教におけるナショナリズム言説の諸相—大衆ナショナリズムの発露とその論法—」『東洋学研究』47: 213-228。
- 鳥井由紀子 1986「教祖伝と聖地の構造—解脱会の信仰の世界—」『東京大学宗教学年報』6: 54-68。
- 辻野彊司 1988『現代女性名鑑』野田経済データサービス株式会社。
- 塚田穂高 2009a「新新宗教における文化的ナショナリズムの諸相—真光と幸福の科学における日本・日本人観の論理と変遷—」『宗教と社会』15: 67-90。
- 塚田穂高 2009b「変貌する「幸福の科学」の今昔—政治進出までの二三年間とその国家観—」『世界』2009年9月号(795): 129-138。
- 塚田穂高 2010a「研究ノート『幸福実現党』とは何だったのか—宗教記事データベース所収記事と選挙データからの分析—」『ラク便り』45: 42-58。
- 塚田穂高 2010b「現代日本における「宗教」と「社会」のあいだ—政治と宗教・宗教事件・不活動宗教法人問題・裁判員制度からの眺望—」財団法人国際宗教研究所編『現代宗教 2010』秋山書店、312-332。
- 塚田穂高 2010c「幸福の科学の映像メディア利用—幸福実現党、映画『仏陀再誕』を中心に—」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2010』平凡社、74-79。
- 塚田穂高 2010d「研究ノート 北海道砂川市有地神社の最高裁違憲判断とその余波—RIRC 宗教記事データベース所収記事から見えてくるもの—」『ラク便り』46: 54-64。
- 塚田穂高 2010e「日本の新宗教における国家観・天皇観と実践—解脱会の事例から—」（学会報告要旨）『宗教研究』363(83-4): 475-477。
- 塚田穂高 2011a「北海道砂川市有地上神社違憲訴訟—政教分離問題の現在とその射程—」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2011』平凡社、144-147。
- 塚田穂高 2011b「幸福の科学とその政治進出について—この運動に我々はどう向きあうか—」『政教関係を正す会会報』38: 12-23。
- 塚田穂高 2011c「オウム真理教が社会に向けて刊行した書籍」宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』春秋社、154-167。

- 塚田穂高 2011d「真理党の運動展開と活動内容」宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』春秋社、307-326。
- 塚田穂高 2012a「戦後日本宗教ナショナリズムの分析枠組に関する試論」『宗教研究』371(85-4):226-227。
- 塚田穂高 2012b「新宗教の展開と現状」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』勁草書房、23-43。
- 塚田穂高 2012c「社会問題化する宗教—「カルト問題」の諸相—」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』勁草書房、45-65。
- Tsukada Hotaka 2012d Cultural Nationalism in Japanese Neo-New Religions : A Comparative Study of Mahikari and Kōfuku no Kagaku, *Monumenta Nipponica* 67-1: 133-157. (translation by Gaynor Sekimori)
- 對馬路人 1990a「世界救世教の影響」井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、85-88。
- 對馬路人 1990b「世界觀と救済觀」井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、223-236。
- 對馬路人 1993「謎の教団・天津教と神政龍神会」『別冊歴史読本特別増刊「古史古伝」論争』新人物往来社、100-109。
- 内山善行 2004「幸福の科学における布教伝道」『現代宗教研究』38: 116-125。
- 上村貞郎・芳賀徹 2008『古寺巡礼 京都 27 泉涌寺』淡交社。
- 上杉聰 2003「日本における「宗教右翼」の台頭と「つくる会」「日本会議」」『季刊 戦争責任研究』39: 44-56。
- 上杉聰 2007「宗教右翼と現代日本のナショナリズム」『年報 日本現代史』12: 163-186。
- 梅原正紀 1972「解脱会 敬神崇祖の超宗派型民衆宗教」猪野健治・梅原正紀・清水雅人『民衆宗教の実像—十二人の教祖たち—』月刊ペン社、47-68。
- 梅原正紀・清水雅人編 1976『創価学会・公明党を問う』大陸書房。
- 梅原正紀 1978「解脱会—身・心・霊の浄化と報恩感謝—」梅原正紀・小野泰博・横山真佳『新宗教の世界Ⅲ』大蔵出版、147-200。
- 魚住昭 2007『証言 村上正邦 我、国に裏切られようとも』講談社。
- 渡邊学 2002「個別事例から見た〈カルト〉問題—脱会者のまなざし、脱会者へのまなざし—」櫻井義秀・渡邊学著／相国寺教化活動委員会編『平成 13 年度 教化活動委員会 研修会 講義録 現代社会とカルト問題』相国寺教化活動委員会、127-183。
- 渡辺雅子 2002「日系新宗教の異文化布教—ブラジル崇教真光の場合—」『明治学院論叢 社会学・社会福祉学研究』111: 29-68。
- 渡辺治 2001『日本の大国化とネオ・ナショナリズムの形成—天皇制ナショナリズムの模索と隘路—』桜井書店。
- 渡辺治 2004「現代日本のナショナリズム」後藤道夫・山科三郎編『講座 戦争と近代 4 ナショナリズムと戦争』大月書店、223-292。
- ヴェーバー, M. 1972 (1920-1921)『宗教社会学論選』大塚久雄・生松敬三訳、みすず書房。
- Weston, Erin Leigh (2002), “Transcultural Possessions in/of Mahikari; Religious Syncretism in Martinique.” *Japanese Studies Review* 6 (1): 45–62
- ホワイト, J. W. 1971 (1970)『ホワイト調査班の創価学会レポート』宗教社会学研究会訳、雄渾社。
- ウィルソン, B.&ドベラーレ, K. 1997 (1994)『タイム トゥ チェントーイギリス創価学会の社会学的考察—』中野毅訳、紀伊國屋書店。
- 薬師院正著・STAGE-CRAFT 編 1991『大川隆法&幸福の科学 教義、靈言を斬る!』恵文社。
- 山田直樹 2004『創価学会とは何か』新潮社。
- 山口文憲 1992「日本ばちかん巡り-7- 崇教真光（岐阜県高山市）種人よ起て 手をかざせ」『芸術新潮』43(4): 126-135
- 山根キク 1964『日本に秘められてある世界の正史』平和世界社。
- Yamashita, A. “The eschatology of Japanese new and new new religions : From Tenri-kyo to Kofuku no Kagaku.” *Japanese Religions* 23/ 1-2 (1998).
- 山下文男 1980『共・創会談記』新日本出版社。
- 柳田邦男・森秀人・しまねきよし・鶴見俊輔 1963『折伏—創価学会の思想と行動—』産報ノンフィクション。
- 矢野絢也 2008 (1994)『闇の流れ 矢野絢也メモ』講談社+α文庫。
- 矢野絢也 2009『私が愛した池田大作—「虚飾の王」との五〇年—』講談社。
- 矢野絢也 2011『乱脈経理—創価学会 vs. 国税庁の暗闘ドキュメント』講談社。
- 安田吉伸 1985a「豊田商事もビックリ アイレディース化粧品店の怪商法を斬る」『政界往来』51-10: 246-258。



- 安田吉伸 1985b 「化粧品を“宗教”で売る新手マルチの実態」『創』15-11 (164) : 58-65。
- 安田吉伸 1986 「新興宗教にも似た奇妙な急成長企業「アイスター」」『化粧品業界戦争の全貌』青年書館、190-213。
- 安丸良夫 1992 『近代天皇像の形成』岩波書店。
- 安丸良夫 1999 『一揆・監獄・コスモロジー—周縁性の歴史学—』朝日新聞社。
- 読売新聞社編 1972 『日本列島改造論批判—わが党は提言する—』読売新聞社。
- 四方田犬彦 2009 『歳月の鉛』工作舎。
- 米本和広 1990 「東大出の仏陀、大川隆法の神霊ゼミナール！」『いまどきの神サマ』(別冊宝島 114)JICC 出版局、208-221。
- 米本和弘・島田裕巳 1992 『大川隆法の霊言—神理百問百答—』JICC 出版局。
- 米山義男 1995a 「幸福の科学—仏国土ユートピアの建設—」清水雅人編『新宗教時代』大蔵出版、211-258。
- 米山義男 1995b 「ス光光波世界神団—スの光と劇画メディア—」清水雅人編『新宗教時代 3』大蔵出版、53-95。
- 吉野耕作 1997 『文化ナショナリズムの社会学—現代日本のアイデンティティの行方—』名古屋大学出版会。
- Young, Richard Fox. “Magic and Morality in Modern Japanese Exorcistic Technologies – A Study of Mahikari” *Japanese Journal of Religious Studies* 17/1 (1990): 29-49
- (署名なし) 1996a 「浄霊医術普及会」井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、108-109。
- (署名なし) 1996b 「野澤明一」井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、544-545。

#### ○ 参考サイト URL

- 解脱会ウェブサイト <http://www.gedatsukai.jp/>
- 新宗連 <http://www.shinshuren.or.jp/>
- 日本会議 <http://www.nipponkaigi.org/index.html>
- 御寺泉涌寺公式サイト <http://www.mitera.org/>
- 御寺泉涌寺を護る会公式ホームページ <http://www.mitera.com/index.html>
- 健康サークル 浄霊法案内 <http://www.joureikai.jp/index.html>
- 参議院 (比例代表選出) 議員選挙 開票結果一覧 (昭和 58 年から平成 19 年まで)  
[http://www.city.musashino.lg.jp/senkyojoho/senkyo\\_data/sangiin\\_senkyo/005141.html](http://www.city.musashino.lg.jp/senkyojoho/senkyo_data/sangiin_senkyo/005141.html)
- 和豊帯の会ウェブサイト <http://wahotainokai.com/>
- アイスターウェブサイト <http://www.ai-star.co.jp/>
- 西山学院高等学校ウェブサイト <http://www.nishiyama.ed.jp/>
- 萌愛調理師専門学校ウェブサイト <http://www6.ocn.ne.jp/~houai/>
- 国会会議録検索システムウェブサイト <http://kokkai.ndl.go.jp/>
- 東京都選挙管理委員会ウェブサイト <http://www.senkyo.metro.tokyo.jp/>
- 幸福の科学 公式ホームページ <http://www.kofuku-no-kagaku.or.jp/>
- 幸福の科学出版 <http://www.irhpress.co.jp/>
- 幸福実現党 公式ホームページ <http://www.hr-party.jp/index.html>
- ザ・選挙 日本インターネット新聞 JanJan <http://www.senkyo.janjan.jp/>

## 論文の内容の要旨

### 論文題目 戦後日本宗教の国家意識と政治活動に関する宗教社会学的研究 —新宗教運動のナショナリズムを中心に—

氏 名

塚 田 穂 高

本研究は、戦後日本宗教なかでも新宗教運動の持つナショナリズムの論理と特徴を明らかにし、それとその運動による政治活動（関与・進出）との関連を考察するものである。

#### 第1章 先行研究と課題設定、方法論

宗教団体の政治活動とは、靖国問題・政教分離訴訟・宗教教育等とともに、戦後日本の政教分離・信教の自由体制下における政教問題の一つである。それを論じるには、戦前と戦後の「国家—宗教」関係枠組の連続性と断絶性に目を配る必要がある。その点で、村上重良・島薺進の「国家神道」論ならびに安丸良夫の「正統」「O（オーソドキシイ）異端」「H（ヘテロジーニアス）異端」論は今も役立つ概念枠組である。

他方で、宗教団体の政治進出とは国家内の一運動の持つナショナリズムの性質や国家への働きかけに関わる問題であり、近現代国家のナショナリズムとその宗教性や国家から宗教への働きかけといった問題とは位相が異なる。よって、従来の歴史学・政治学等でのナショナリズム論をそのまま参照することはしにくい。ここでは多義的なナショナリズムを分析するために、先行研究から析出した①文化・伝統観、②天皇観、③対人類観、④経済的優位観、⑤戦前・大戦観、⑥欧米・西洋観の6指標を設定する。

次に、新宗教運動の研究史上では戦後新宗教のナショナリズムの問題は明確な位置付けを得ていなかった。先行研究の中では、自己から世界に至る救済の段階論の中に「国家」の次元が含まれるという指摘と、宗教運動の世界観における「あるべき日本」像に着目すべきという指摘が重要であり、そのユートピア観をおさえる必要がある。

また、新宗教運動の政治活動の研究史においては、選挙結果や政策方針等が焦点化され運動の世界観と連結させた考察が乏しいこと、事例が創価学会＝公明党に偏っていること等が指摘できる。

以上を踏まえ、本研究では、資料調査と教団調査に基き、上述の指標を用いて戦後日本の新宗教運動のナショナリズムの特徴を分析する。そして、(1)宗教運動が自前の政治団体を結成し独自の候補を複数擁立する「政治進出」に至るには、強い宗教的動機が介在している、(2)そうした場合、当該運動は既成政党とその候補を支援するような順体制的な枠に留まらないという点で、戦後の「正統」的宗教ナショナリズムに収斂しえない「H 異端」性を具えている、(3)そうした場合、そこにはその運動に独特のユートピア観が存在する、という3つの仮説的命題を検証し、新宗教運動の政治進出の特性を明らかにする。主たる政治進出の事例として扱うのは、創価学会＝公明党、浄霊医術普及会＝世界浄霊会、オウム真理教＝真理党、アイスター＝和豊帯の会＝女性党、幸福の科学＝幸福実現党の5つである。

## 第Ⅰ部 戦後日本の「正統」的宗教ナショナリズムとその周辺

独自の政治進出の事例群を論じる前段として、保守系既成政党や政治家を支援・推薦する「政治関与」のタイプをまず考察する。

### 第2章 宗教運動と保守合同運動

神社本庁や生長の家、解脱会等の宗教運動または日本会議等の保守合同運動は、独自の政治進出という道は取らずに、主に自由民主党とその候補を支援してきた。愛郷心・愛国心・敬神崇祖・皇室崇敬を重視する神社本庁は、戦前日本の「国家—宗教」枠組との連続性とその復帰志向という意味での「正統」的宗教ナショナリズムを唱えてきたと言える。他方、生長の家や解脱会、また保守合同運動に加わる数々の新宗教運動はそれぞれ独自のナショナリズムを保持する「O 異端」と言えるが、「正統」的宗教ナショナリズムの求心性に引きつけられる形で歩調を一にしている。

### 第3章 真光のナショナリズムと運動展開—靈的日本中心主義・皇室崇敬・超伝統性—

真光（世界真光文明教団・崇教真光）は、いわゆる『竹内文書』の系譜をひいた特異な日本中心主義・天皇観・超伝統性を具えており、「O 異端」としてもかなり「正統」との距離がある運動だが、それも天皇崇敬・伝統重視という「正統」的宗教ナショナリズムの軸に収斂せられ、保守合同運動の一翼を担っている。

よってこれらの運動においては、独自の政治進出という道は取られないのである。

## 第Ⅱ部 宗教団体の政治進出の事例研究

戦後日本社会において、自前の政治団体を結成し、独自の政治進出をなした5つの新宗教運動の事例を検討する。

### 第4章 創価学会＝公明党—王仏冥合論と国立戒壇論からの政治進出—

1954年の地方議会・56年の国政進出以来、大きな影響力を保持してきた創価学会＝公明党だが、その進出の背景に元来あったのは、日蓮正宗教学の伝統を基盤とした、特に第二代会長・戸田城聖によって提示された王仏冥合論という宗教的政治思想と国立戒壇建立という独自のユートピア観である。日本民族の中心性や使命も語られたが、それは「正しい宗教」である日蓮正宗が存在するゆえであり、「正統」の求心性が働かない「H 異端」性が強くあった。

### 第5章 浄霊医術普及会＝世界浄霊会—浄霊普及・政治進出・地上天国—

世界救世教から分派した浄霊医術普及会＝世界浄霊会は、1983年から5回の参院選に毎回10名程度の候補を立てた（全員落選）。政治進出の動機は第一に浄霊法の普及にあり、手段的な進出であった。「日本精神」「大和魂」復興の主張も、浄霊法の普及の一点に特化されていた。救世教の教祖・岡田茂吉の近代医学批判・薬毒論を原理主義的に突き詰め、それに基いた地上天国実現というユートピア観の上に展開されたものだった。救世教は既成政党の支援を行ってきたのと対照的に、「正統」に収斂されるべくもなかった。

### 第6章 オウム真理教＝真理党—シャンバラ化の夢想、ハルマゲドンの回避と政治進出—

1990年の衆院選に麻原彰晃ら25名が出馬（全員落選）したオウム真理教＝真理党の政治進出は、政治力の必要性や教団の宣伝といった利害状況から従來說明されてきた。だがその底流には、80年代後半にオカルト雑誌で展開されたシャンバラ化という独自の強いユートピア観と終末であるハルマゲドンの回避という宗教的動機が運動初期から常にあり、その展開としての政治的アプローチであった。日本の使命も説かれたが、それは唯一絶対の存在である麻原の中心性により担保されるものであり、「正統」とは極めて遠い位置にあった。

### 第7章 アイスター＝和豊帯の会＝女性党—化粧品販売から宗教、そして「新しい女性の時代」を目指す政治へ—

1995年から6回の参院選に毎回10名超の候補を擁立したアイスター＝和豊帯の会＝女性党

は、化粧品会社から宗教団体・政治団体へと展開していった例である。国家意識やユートピア観に具体性は乏しいが、指導者の教えを広めるという使命感に基き、「女性の時代」「新しい時代」の実現を目指す政治進出がなされた。伝統性の強調や皇室崇敬等はほぼ見られず、「正統」からは隔たりがあった。

## 第8章 幸福の科学＝幸福実現党（1）—宗教ナショナリズムの原型と運動展開—

教祖の大川隆法を含む 337 名が出馬（全員落選）した 2009 年衆院選より政治進出を開始した幸福の科学＝幸福実現党には、その宗教運動の初期から、現代の日本・日本人が霊的に選ばれており黄金時代を迎えるだろうという世界観が原型としてあり続けた。また、宗教的価値に基いて社会の諸セクターが営まれるべきとするユートピア観があった。そして、そのナショナリズムを強く裏打ちしていたのは、日本の経済的繁栄の状況であった。

## 第9章 幸福の科学＝幸福実現党（2）—宗教立国のための政治進出とその展開—

幸福の科学＝幸福実現党の政治進出の背景には、これらのナショナリズムと「仏国土ユートピア」実現を目指すユートピア思想、立教から 20 年ほどを経た組織状況と新たな運動目標の創出、内憂外患意識等があった。日本の使命や優秀性を強調するものの、大川＝エル・カンターレを至高存在とし、日本文化や皇室崇敬の位置を相対的に低くしているという点で「H 異端」性を有しており、独自の政治進出の道が取られたのである。

## 結論

以上の諸事例の検討から、戦後日本宗教のナショナリズムと政治活動の関係性の特徴が明らかにされた。

戦前と連続的で伝統と皇室崇敬を重んじる「正統」的宗教ナショナリズムは、戦前であれば弾圧・統制されたかもしれない「O 異端」の新宗教運動をも多く巻き込んで保守合同運動をなし、保守系既成政党・政治家支援の政治活動を行っており、その求心性は強い。

他方、独自の政治進出をなした 5 事例に共通するのは「正統」的宗教ナショナリズムの求心性には収斂されえない「H 異端」性であり、独自のナショナリズム論理や国家意識、ユートピア観が存在している。また、世界浄霊会や女性党に顕著のように、教えや救済の方途を広めるためという手段的で集団アピール的な動機も目立つ。対して、日本の伝統性や天皇・皇室崇敬重視の傾向は稀薄である。

こうした宗教団体の独自で自由な政治進出を可能にしたのは、戦後日本の「国家—宗教」関係の体制である。だが、高度成長期の教勢伸張を基盤に実際的な社会的影響力を獲得した創価学会＝公明党を別にすれば、現実的には些末なものである。教団独自の世界観・ユートピア観に基いた宗教の全域化・復権を目指す政治進出とは、その独善性・排他性も強い「H 異端」性と分節化された一宗教運動に過ぎないという点で、社会における共感の基盤は乏しいものとならざるをえない。

国際比較や戦前戦後・他タイプとの比較等の課題は残るが、ナショナリズム・国家意識・ユートピア観に注意を払いながら戦後日本の新宗教運動を中心に政治進出の比較を網羅的行った本研究は、宗教団体の政治進出の問題を検討し、創価学会＝公明党の特殊性や発展要因を再考する意味でも、研究史上に新たな蓄積をなし、同テーマの最前線を開拓できたものだと言える。